Özlem Madi-Sisman. 2017. *Muslims, Money, and Democracy in Turkey: Reluctant Capitalists*. Palgrave Macmillan. viii+184 pp.

国民の9割以上がムスリムであると同時に、世俗主義を国家原則として掲げているトルコにおいて、その特異な状況下での、イスラームの在り方は常に注目され、様々なアクターが研究の対象となってきた。そして、本書もそうした文脈の中に位置づけられると言えるであろう。本書において著者が着目したのは、トルコにおいて1980年代以降に台頭した企業家層である。彼らの特徴として、その多くが敬虔なムスリムであることが挙げられるとともに、彼らの台頭とイスラームの関係性が注目されてきた。本書は、そうした企業家層に関して、その基本的な沿革を踏まえると同時に、それを事例としてイスラームと資本主義という大きなテーマの考察を試みた意欲作となっている。

本書の著者は、ヒューストン大学クリア・レイク校の政治学部で教鞭を取っており、主に現代トルコのイスラーム経済のポリティカル・エコノミーについて企業家に焦点を当てて、研究している。本書は、博士論文をベースとして出版された最初の単著となっている。

本書は、序章と終章を含む以下のような8章から構成されている。

第1章　導入
第2章　イスラームと資本主義の適合性――歴史的観点から
第3章　新イスラーム経済資本の台頭
第4章　新イスラーム政治資本の台頭
第5章　新イスラーム文化資本の台頭
第6章　イスラーム急進主義からイスラーム資本主義へ――イギアド（İGİAD）を事例として
第7章　イスラーム資本主義とその批判
第8章　結論

序章となる第1章では、本書における研究対象と目的について述べられている。著者は、トルコにおける社会とイスラームの変化に伴う形で台頭した資本家層の存在について言及し、本書においては「新イスラーム・ブルジョワ階級」（neo-islamic bourgeoisie class）（p. 7）と称すると提起した。その上で、彼らの台頭の要因となった社会の変化と、それによる経済、政治、文化といった各領域における、「イスラーム資本」（Islamic capitals）（p. 12）の形成について論じることを本書の目的の一つとして提示している。また、「新イスラーム・ブルジョワ階級」を通してイスラームと資本主義の関係性について考察することも重要な目的として掲げられている。

第2章では、以降の議論の背景として、イスラームと資本主義の適合性に関してなされてきた議論について概観している。著者の整理によると、資本主義は収奪に基づく野蛮な経済体制であるとしてイスラームとの適合性は全面的に否定され、イスラームに基づいた新たな経済体制の構築が必要であるとする言説が従来は支配的であった。しかし、こうした傾向は20世紀後半以降より変化が見られ、双方の共通点に目を向けることで、両者の適合性を模索する潮流が生まれたという。その要因として著者は、一部のイスラーム諸国やムスリムが、政治や経済といった分野で成功を見せ始めたという社会的状況の変化を指摘した。また、それを踏まえて、著者はイスラーム経済をめぐる言説は、一方的に経済的な実践を規定するのではなく、その形成において現実的な状況や経験から影響を受けており、理論と実践の間で相互的な関係性が構築されていると論じている。

第3章では、主にイスラーム経済資本の形成について論じている。その背景として著者は、1980年代の重要な政策を取り上げた。具体的には、新自由主義経済の導入と、トルコ・イスラーム総合論の採用である。これらは、社会状況の改善を目的としていたが、その影響により、世俗主義を掲げる国家による庇護を受ける世俗主義的なエリートと、周縁化される世俗主義や西欧的な価値観に反対するような敬虔なムスリム、と

いう経済的な縮図が崩壊し、敬虔なムスリム企業家も、経済的地位を向上させることが可能な状況が生まれたという。さらに、そうした中でイスラーム経済資本の蓄積を促進した要因として、著者はイスラーム銀行に着目した。トルコにおいては、1980年代以降より設立され始めたイスラーム銀行は、それまで銀行を利用していなかった敬虔なムスリムの資金を金融市場へ引き出すと共に、その資金をムスリム企業家層へと融資することで、資本の循環を促し、経済資本の形成に貢献したと述べられている。

第3章の後半部分と第4章では、イスラーム政党が取り上げられている。著者は、トルコ・イスラーム総合論が採用された1980年代以降、イスラーム政党の台頭が顕著になってきたことを確認した上で、イスラーム政党による言説や政策を、イスラームを重視する人々の団結と統合に貢献したと評価する。また、その中でも公正発展党（AKP）は、それ以前のイスラーム政党とは異なり、イスラーム的な言説を表立って掲げる傾向は薄れたものの、「新イスラーム・ブルジョワ階級」と密接な関係性を築いたという。その例として、設立メンバーに、彼らを代表する経済団体であるとみなされているミュスィアド（MÜSİAD）に所属する10名の会員が含まれていたこと等を挙げ、そうした企業家層が公正発展党の形成と成功に寄与すると同時に、公正発展党の成功や権力の拡大は、「新イスラーム・ブルジョワ階級」の政治資本として機能し、さらなる発展をもたらしたと評価している。

第5章では、「新イスラーム・ブルジョワ階級」による文化形成に焦点が当てられている。著者はブルデューによる定義に則り、文化資本を「それによって自身により高い社会的地位が与えられる、人々の知識、技術、教育、優位性の形態」（p. 100）と定義した。その上で、イスラーム的なアジェンダを含んだ教育機関、メディア、出版事業の展開を取り上げ、これらは「新イスラーム・ブルジョワ階級」の文化資本を形成する役割を担っているとした。また、こうした資本の形成は、「新イスラーム・ブルジョワ階級」を「他」と明確に区別するものであり、ヴェールに代表されるような宗教的な商品の生産や消費が活発になったが、それは形成された階級意識の表出としての意味を含むものでもあるという。

第6章では、「新イスラーム・ブルジョワ階級」を事例として、資本主義とイスラームの適合性について考察がなされている。資本主義経済下での成功と並行する形で、ミュスィアドを中心として形成された言説は、資本主義にイスラーム的価値観を統合する経済主体としてのムスリム像を説くものであり、そこでは、ムスリム自身を媒介とすることで、イスラームと資本主義の適合性が見出されていると論じられている。

その一方で、著者は両者の関係性の中には依然として論点が残されているとし、それを示す事例としてミュスィアドから分離する形で設立された経済団体であるイギアド（İGİAD）を取り上げている。本書において「階級の中でより保守的な層を代表する」（p. 169）として位置付けられたイギアドの会員に対するインタビュー調査から明らかになったのは、「消費」の拡大に対する強い批判であった。イスラームでは必要以上の浪費であるイスラーフ（isrāf）は咎められるべきことであるとされているが、富の蓄積に伴い宗教的な商品を中心として消費が拡大した。イギアドの会員は、大部分でミュスィアドに代表される「新イスラーム・ブルジョワ階級」の主流派と軌を一にしているものの、資本主義経済下での富の蓄積とそれに伴う消費文化の拡大を、イスラーム的規範を犯すものであるとして非難しており、消費をめぐって、新たな階級の内部においても立場の相違が生まれていることが明らかにされた。

第7章では、これまでの章で論じられてきた「新イスラーム・ブルジョワ階級」に対する、イスラーム的な観点から加えられている批判について言及がなされる。著者はその批判の主体として4つの立場を挙げ、代表的な知識人の言論等の引用により、その内容を紹介している。それらに共通しているのは、「新イスラーム・ブルジョワ階級」は消費の肯定を始めとして資本主義の影響を強く受けており、イスラーム的な価値観がないがしろにされているというものであった。

終章となる第8章では、以上の各章を踏まえ、著者は、「新イスラーム・ブルジョワ階級」によって、イスラームと資本主義の適合性が見出されたと結論付けた。しかし、消費をはじめとし、依然として論点は残されており、今後も両者の間で、「新イスラーム・ブルジョワ階級」は自身の道を模索し続けるとして、本書を締めくくっている。

以上に本書の内容を概観したが、本書の新規性についてトルコの企業家研究とイスラーム経済論という2つの観点から取り上げてみたい。まず、著者が、「新イスラーム・ブルジョワ階級」として定義した、トルコ

の企業家研究における本書の新規性として、イギアドを事例として取り上げた点が挙げられる。これまでも、トルコにおける敬虔なムスリム層の経済的な台頭や、その中における経済団体に焦点を当てた研究は行われてきたが、その大半がミュスィアドに着目したものであった。ここで重要なのは、イギアドを通して、著者が提起した「新イスラーム・ブルジョワ階級」内における思想的な多様性が示されていることである。地域間や産業間、また組織としての多様性に関しては、これまでも多く言及されてきたが、本書が取り上げたようなアイデンティティの側面では、世俗主義的なエリートと対比させる形で、イスラームの価値観に基づくものとして、統一的な形で描写されることが多かった。しかし、本書においてイギアドを事例として展開された議論においては、イスラームを重要視する中でも、消費という論点を軸として「階級」内における思想的分化が生じていることが著者のインタビュー調査を通して示されており、これは、従来の研究で見られた、二項対立的な認識を問い直すものであると言える。

他方で、イスラーム経済論の観点からは、イスラーフ（必要を超えた消費）に焦点が当てられている点が注目に値する。イスラーフに関しては、イスラームの教義に基づいた経済の実現を模索する「イスラーム経済論」が展開される中でも、イスラームが示す経済的な原理の1つとして言及が為されてきた。個々人の「必要」を超える消費は許容されないという原則の存在に関しては、共通の認識がある一方で、具体的に「必要」と「浪費」の境界線がどこにあるのかという点に関しては、クルアーンにおいて明確な判断基準が示されているわけではない。消費の機会が生活の中に溢れている現代は、判断を下すことがより困難になっている時代であると言えるだろう。本書において示された「新イスラーム・ブルジョワ階級」の事例は、イスラーフを巡るこうした状況が、より緊張を伴った形で現れたものであると捉えられる。イスラーム経済において代表的なものとして取り上げられる、リバーをめぐる議論が、銀行をはじめとする金融機関の業務という、実践的な領域と相乗的に発展してきた点を考慮すると、本書の内容は、トルコ固有の状況を示すものに留まらず、イスラーフに関する議論が発展する上での、重要な事例を提供していると評価できる。一方で、本書はあくまでも「新イスラーム・ブルジョワ階級」の動態を描くことに重点を置いているため、イスラーフに関する理論的な議論などは、本書の範疇を超えている。今後は、本書の内容を踏まえた上で、よりイスラーフに焦点を当て、「新イスラーム・ブルジョワ階級」を1つの事例として相対化するような、イスラーム経済の観点からの研究への発展も期待される。

以上のように、本書は「新イスラーム・ブルジョワ階級」とイスラーム経済論の双方の文脈において、新たな論点を提供している点で、学術的な意義を有するものであると判断できると同時に、一般的には馴染みの薄い「新イスラーム・ブルジョワ階級」に関しても、基本的な事項からの紹介が試みられており、その概観を掴むことに与する内容となっている。こうした点を踏まえると、幅広い読者層にとって有益な著作であると言える。

（住吉　大樹　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）